

1年目
平成24年度

「対話の場づくりと大槌の 地域資源(文化)の見直し」

文化芸術を活用した人材育成事業
共同主催：大槌町、東京文化発信プロジェクト室
(公益財団法人東京都歴史文化財団)

文化芸術による大槌町まちづくり人材育成事業「ひよっこりひよたん塾」は、大槌町民と町外の文化・まちづくりの専門家達との協働により実施。ソフト面からのまちづくりを主要テーマとする「文化芸術まちづくりゼミ」を全五回開催。さらに芸術家とともに町民が主体的にその運営プロセスに関する事業「きむらとしろうじんじん野点in大槌」を開催する。



2年目
平成25年度

「地域人材の育成スキルアップ実践講座」

平成25年度 復興支援の担い手の運営力強化実践事業(右手島)
東京都、東京文化発信プロジェクト室
(公益財団法人東京都歴史文化財団)

地域におけるリーダー的資質、今後地域における活躍を期待できる人材へのアプローチが行われた。四回講座を専門家と共に企画運営し、ひよたん島や町づくりのソフト事業に対応しての活用法への示唆が行われた。協議体における運営により、民・官の共同事業の体系が実践された。事業参加者が主体的に、自主企画イベント等の運営側やステークホルダーとなる機会となっている。



3年目
平成26年度

「まちづくり人材実践のステップ」

東京都、東京文化発信プロジェクト室
(公益財団法人東京都歴史文化財団)

大槌町コミュニティ再生会議、新しい東北若者チャレンジ事業

ひよたん塾は、三年を通じ地域資源の価値化、表現手段の多様化や発信力の多様化、地域特性を活かせる人材を育む機会を提供してきた。平成26年度ひよたん塾通信「tatsuto」は、町内で動き出している若者を中心とした活動を取り上げる。地域資源としての人材や町の文化歴史・自然・特産、今回の東日本大震災に関連するものも含め、「大槌の大切な資源」として捉え直しこれからのまちづくりの可能性を広げていく事に期待する。



【森 司】

公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化発信プロジェクト室
地域文化交流推進担当課長
[Art Support Tohoku-Tokyo (東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業)]のディレクター

「お疲れ様でした。」と言葉を送ることが、今の私に求められていることのように感じている。文化的復興支援活動は、頑張りすぎずに寄り添う形でなされ、支援側の意思や活動が前景になりすぎず、出しゃばった御節介にならぬように後景としてあるのがいい。そのことを自分は学ぶ。震災の傷の深さと大きさの輪郭が、震災から四年の月日が経ち、より明確になっている。それゆえに傾聴するように大槌の地を見守る姿勢は、以前にも増して支援のスタンスの一つになるはずだ。大槌の街が人や風景を取り戻し、新しい日常を手に文化芸術に余裕をもって時間を資するその日の実現の一助に再び「ひよっこりひよたん塾」が必要とされるときまで。



【大吹 哲也】

特定非営利活動法人いわて連携復興センター 事務局次長

ひよっこりひよたん塾が始まったのは、二〇一二年十一月です。フィールドは岩手県内においても特に甚大な被害のあった大槌町。町はがれきがようやく片付き、避難所から仮設住宅へ移行が終わったころでした。その中で、地域資源とアートプログラムを融合させ、人材育成を行うことを目的とした「ひよっこりひよたん塾」は産声をあげました。開催前には、どれくらいの方に来ていただけるのか心配なところもありましたが、ドラッグライターの格好でお茶を入れるアーティストや、空間デザイナー、日常を切り取るクリエイターなど、これまでの大槌にはない新しい価値観を持った人々が続々と訪れ、地元の担い手の皆さんと一緒に大槌を考えていきました。うれしいことは、参加された方の多くが、今も何かしら大槌のまちづくりに関わっていることです。自分たちの住むまちを知り関わるきっかけになっただけでも、ひよっこりひよたん塾開催の意義があったと思います。



【阿部 智子】

ひよっこりひよたん島プロジェクト実行委員会会長

三年間にわたってさまざまな内容構成で開講された「ひよたん塾」それぞれの年で塾(主催者)も塾生(参加者)も共に学び成長してきました。(ひよたん塾通信)を見てその懐かしい光景に思いをはせます。

野点の開催は、町の人の協力と主体性を引き出し「塾を卒業」しても毎年続けて実現しています。ひよたん島のストーリーやキャラクターから学ぶことも探究してみたり、各地のひよたん島の縁をつないだりしました。

通信自体も初めは作ってもらっていたところが多かったけれども発行回数を重ねるたびに自分たちで創り出す要素がたくさん増えました。「何かをやる」ためには思った以上の詳細な準備が必要になりますが、関わる人の思いが熱くなればそれだけ素晴らしい結果に結び付きます。その過程で実に多くの学びが用意されているという事に気づきました。ひよたん塾に関わってくださいましたみなさんご協力ありがとうございました。いつの日か同窓会などできたらいいですね。その時を楽しみに……。



【アサダワタル】

日常編集家

二〇一二年度ひよっこりひょうたん塾ゼミ

監修担当

二〇一二年に「ひよっこりひょうたん塾」の立ち上げに関わり、度々大槌を訪れた際は、「文化」や「ソフト事業」を軸にまちづくりを始めるとい志を多くの方々と共有することの難しさを心底痛感しました。そしてそれは決して悪いことばかりではなく、同時に、大槌の方々と復興に携わる外部の人材が、とにかくわかりあえない前提で「対話」を積み重ねていくことが大切なのだという気付きへと繋がったのです。それは「事業」といった枠を取っ払って、人と人、個と個として出会ってゆくような環境を作ること。それこそがとても重要だと学ばせてもらいました。その経験は僕がいま関わっているあらゆる仕事にそのまま息づいています。

僕自身の塾への関わり方は、決して十全ではなかったと反省すべきことも多いのですが、これからも大槌で出来た素敵な縁を時に手繰り寄せながら、未だ観ぬ希望へ向けて、何かしらご一緒できれば本当に本当に嬉しいです。



【遠藤 智栄】

地域社会デザイン・ラボ 代表

二〇一三年度ひよっこりひょうたん塾

ファシリテーター

「たつととな人」。

ひょうたん塾がキーワードにしているこの言葉に皆さんの思いをとでも感じます。

自分自身の興味関心に気づき、地域の人やあるモノについて考えた時に自分の中に沸き起こってくる芽を大切に育てる…。

この芽が育つかどうかは、応援してくれる・伴走してくれる人がいるかどうかが大いいのではないのでしょうか。

地域に暮らす時、自分の周りの人が何が好きで何を成し遂げたいと思っっているかを知ることがその一歩になると思います。この応援しあえる関係をつくることは、自分の人生が豊かになると共に地域の活き活き度にも関係してきます。語り合い、実践し振り返り、次につなげていくこと。

何度でもチャレンジできる場づくりを応援しています。

♪・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・♪



ひ

よっこりひょうたん塾は、主体的な住民参加を行える仕組みを考え、体験し、住民自身が町の価値化をしていく機会を提示してきました。

今後とも一人一人がこの復興のプロセスにおいて創造的な知恵が互いに共有される「対話の場づくり」と、それらを通じて様々な分野の専門性を活かし、「大槌町ならではのまちづくりを担う人」が育まれることを目指していきます。

NHKひよっこりひょうたん島の歌詞「泣くのは嫌だ、笑っちゃお進め〜♪」とあるように、将来に向けて夢や興味を持ち続け前向きに進む姿勢を、これからのまちづくりを担う一人ひとりに大きな期待を寄せています。

事務局 元持幸子

これまでの通信は、HPよりダウンロードできます。

ひよっこりひょうたん塾

振り返り



ひよっこりひょうたん島プロジェクト実行委員会
HP <http://www.hyotanjuku.jp/>
FB <https://www.facebook.com/hyoutanjyuku>
E-mail hyotanjuku@gmail.com

